変わりゆく徳之島の子育て

中村　ますみ*

はじめに

本学地域総合研究所のプロジェクト協同研究において，「子育て支援事業における音楽活動の活用」をテーマとした。子育て支援にアプローチするために，3つの方向から探っていくことを計画している。その一つが，出生率の高い地域における共同体特有の住民意識について調査し，分析されたそこにある要素を，音楽活動内で再現できないかという試みである。音楽の持つ社会的機能をどのように活動化していくかについて考えていきたい。

上記の出生率の高い地域として取り上げるべきは，やはり「子宝の島　徳之島」であろう。この島の存在は，同じ県内に住む者として幸運の一語に尽きる。この島の夫婦が，全国平均をはるかに上回る数の子どもを持つ，持てる所以はどこにあるのか，ここにある子育ての魅力とは何なのか，それらを探るために多くの研究者が注目し，鹿児島県はその価値を活用すべく，平成16年度から10年間「あまみ長寿・子宝プロジェクト」を実施した。このプロジェクトの報告書でまとめられていること，徳之島に関する著作などから，世代間交流によって子育てを支える環境があり，その伝統が受け継がれているのであろうとのイメージを持って，平成28年11月21日・22日に，徳之島3町役場・保健センター，子育て支援に取り組むNPO法人を訪問した。しかし，徳之島を実際に訪問して感じたことは，筆者が抱いていたイメージとやや異なるということであった。

そこで，現在子育て中の当事者たちの声を直接聞きたいと思い，平成29年1月12日から3日間，再び徳之島を訪れた。音楽活動を通して出会った子育て中の親たちに対してアンケートを実施したほか，NPO法人で子育てを支援する立場にあるスタッフやファミリー・サポーター，保育所経営者などから聞き取り調査を行い，さまざまな声を集めた。本稿は，この2回の調査をもとに，今まさに変わりつつある徳之島の子育てを考察したものである。

1　子宝の島　徳之島

徳之島は，奄美群島のほぼ中央に位置し，面積は約247.77平方キロメートル，本土から約480キロ南に位置する。徳之島町，伊仙町，天城町の3町があり，人口は計約27,000人を有する。気候は，亜熱帯海洋性で四季を通じて温暖多湿，年間降雨量約2,000mm，平均気温は約21.7℃，主要産業はサトウキビ，ジャガイモ，熱帯果樹などの農業，近海漁業，黒糖を原料とした菓子，黒糖焼酎製造などである。

この島が「子宝の島」として注目されることとなったのは，厚生労働省による「平成15年～平成19年の合計特殊出生率」が発表され，市区町村別の順位で徳之島3町が上位3位を占めたことによる。徳之島3町

キーワード：徳之島，出生率，子育て，子育て支援，世代間交流，子育て環境の変化

＊本学福祉社会学部准教授

の合計特殊出生率は，全国のそれと比較しても驚くべき数字である。上位3位独占した平成21年1月発表の数字は突出しているが，さらに平成25年発表の数字も注目に値する。特に伊仙町の数字は，2位の沖縄県久米島町（2.31）を大きく上回るものである。

表１　全国及び徳之島3町の合計特殊出生率と市町村別順位の比較

	全国	伊仙町	天城町	徳之島町
平成15年～平成19年	1.37	2.42（1位）	2.18（2位）	2.18（3位）
平成20年～平成24年	1.38	2.81（1位）	2.12（10位）	2.15（5位）

出典：人口動態保健所・市区町村別統計（厚生労働省）のデータにより作成

これらの数字を追い風に，今まさに島を挙げて「子宝の島」をアピールしている。平成24年，徳之島空港は開港50周年を記念して愛称を募集し，「徳之島子宝空港」が採用された。空港に降り立つと，大きなお腹の空港スタッフが写ったポスターが目に入る。背景に写る「寝姿山」は，妊婦が横たわっている姿のようだと紹介され，この島を象徴する景色として観光の1スポットになっている。

写真1　空港に貼られていたポスター

２　徳之島の子育て支援の実態

(1) 行政における支援策

徳之島の3町は，いずれも平成27年10～12月に「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を発表している。それらを参考にしながら，3町役場での聞き取り調査の結果をまとめる。行政支援としては，県の取り組みである特定不妊治療費の助成に連動した不妊治療旅費助成（妊活支援旅費助成）などはあるものの，他の地域と比較して特色的なものは見当たらない。天城町は少子化対策児童養育助成事業として，保育料の無償化をスタートさせたことを強調していた。伊仙町においては，前項の合計特殊出生率の2.81という数字が，それまでの2.4台から急に上昇したのは，出産祝い金を引き上げた効果もあるのではないかと分析していた。一方，徳之島町は出産時のみの一時的な支給と出生率向上を安易に結び付けられないと，現在のところ祝い金の導入には慎重である。徳之島町は，この島への転勤族の多くが住む町であることから，社会福祉協議会やNPOと連携したファミリー・サポート事業等に積極的に取り組んでいるようだ。また，未熟児養育医療給付や障害児の療育に対する旅費助成は他2町に先んじて導入している。

表2　徳之島3町における子育て支援事業の比較

	天城町	伊仙町	徳之島町
出産祝金 （子育て支援金）	第１子　50,000円 第２子　50,000円 第３子以降　100,000円	第１子　50,000円 第２子　100,000円 第３子以降　150,000円	
不妊治療旅費助成 （妊活支援旅費助成）	県からを受けた夫婦に対し，交通費（1回の治療につき9回まで） 宿泊費（１泊上限5,000円を基準に，1回の治療につき15泊まで		
ハイリスク妊産婦出産支援（旅費助成）	妊産婦と新生児 旅費と宿泊費の一部を助成	妊産婦 旅費と宿泊費の一部を助成	妊産婦と新生児 旅費と宿泊費の一部を助成
乳幼児医療費助成	6歳未満，全額助成 （来年度以降，中学卒業時までに延長予定）	0～6歳児毎月3,000円を控除した額を助成	小学校入学前の子どもに助成
妊婦・乳児健診助成	妊婦14回，乳児1回		妊婦14回，9～11ヶ月児
産前・産後，母子保健に関するもの	妊産婦・乳幼児健診訪問	マタニティ教室 妊産婦・乳幼児訪問	マタニティクラス 新生児（産婦）訪問
その他（主なもの）	少子化対策児童養育助成事業 （保育料無償化） 相談掲示板	延長（預かり保育） ひとり親家庭等医療費助成 養育医療	親子教室，一時保育・学童保育 未熟児養育医療給付 巡回支援訪問 ひとり親家庭等医療費助成 療育旅費助成

出典：徳之島3町の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」及び「南の島の楽園奄美群島への移住支援サイトねりやかなや」を参考に作成

(2) 地域にある子育て支援

徳之島が「子宝の島」と言われる所以は，少子化進行に伴って国や行政が打ち出した最近の支援策ではなく，古くからある伝統的な子育てに答えがあるのではないか。そこで，島民たちが実感している徳之島の子育ての良さを調査した。未就学児を持つ男女26人が回答したアンケートには，「地域の人が気さくに声をかけてくれる」「周りの人がすぐ抱っこしてくれたり，かわいがってくれる」「地域の人と触れ合える」「みんな見守ってくれる」などの記述が多く，子育てに関わる「人」の存在が重要な鍵であり，地域力の高さが感じられる。

平成22年2月に行われた「長寿・子宝シンポジウム」において，伊仙町保健センターはアンケートを行い，769名から回答を得ている[1)]。ここでは「思い」「考え」などが問われ，徳之島特有の精神文化の存在が窺える。

表3　住民意識：「子宝の島」と言われる要因（平成22年2月　伊仙町保健センター調べ）

設問：昨年（平成21年）1月，伊仙町が子宝日本一となりましたが，子宝の島と言われる要因はズバリなんだと思いますか。（複数回答）	
親や兄弟，友人，近所の人など子育てを支援する人がいる。	48.5%
子どもが多くても何とか育てていけると思う。	44.1%
子どもは大事（くわぁーど宝）なので授かった子どもは大事に育てようといった考えが地域にある。	41.6%
兄弟が多い方が子どもたちにとっても良いといった考えが地域にある。	35.0%
子どもは多い方がいいといった考えが地域にはある。	33.9%
子どもは島で育てたいといった思いが強い。	24.6%
お産施設がある。	5.7%
子どもが多くても育てるだけの経済力がある。	5.1%
その他	4.7%

出典：「伊仙町子宝支援」伊仙町保健福祉課・保健センター（平成28年4月）

３　徳之島の子育てを支えるもの

(1)「子どぅ宝」という文化

前項において島の人々が意識している「子どぅ宝＝子は宝」という価値観は，どのように生まれ，受け継がれてきたものであろうか。徳之島においては，特定の宗教というより，先祖崇拝が最も拠り所とされてきた。

尊い先祖の残した教訓として，口承で受け継がれているのがテーキバナシ（島のことわざ）である。徳之島を含む奄美群島の島々の土産店で，日めくりカレンダーなどの形で売られているのを目にすることが多いが，後世に伝えたいものとして守ろうとする，島の人々の願いが伝わってくるようである。

古くからのテーキバナシには，子どもに関するものも多い。『徳之島の民俗文化』で松山光秀が「親と子の愛に関するもの」「命に関するもの」の項で挙げているものから，一部抜粋する[2)]。

「子ヤ先祖ヌ成リ代ワイ」（子どもは先祖の生まれ代わりである。）
「子カンミィヤ村中ヌ揃ティ　待チュン」（子どもの出産は村中の人々が待ちわびる）
「命ヌ福、命ヌ分限」（命は最高の幸福、そして最高の宝）

これらは，先祖の生まれ代わりの子どもは，神のように崇拝されるべき存在であることを示している。島では出産のことを「子カンミィ」といい，「尊い生命を神から押しいただく」という意味が秘められているという。それゆえに皆で待ちわび，最高の幸福，宝だと盛大に祝うのである。

伊仙町保健福祉課で，これらが精神文化として確かに根付いていることを証明するような情報を聞いた。ある時，伊仙町で毎年開催されている集落座談会で，高齢者から「敬老祝金を子どもたちに使ってほしい。」という意見が出されたという。その声は条例改正につながり，85歳と88歳の祝金は廃止され，子育て支援金の一部として使われている。島の高齢者たちはこの精神を日々暮らしの中で実践し，次の世代に身を持って示している。さらに，この高齢者たちの決断について若い世代は誇らしげに語っていた。島で高齢者が敬われる存在である所以であろう。

(2) 盛んなお祝い事

前項の文化は，現代の人々の暮らしの中でどのように体現されているのか。調査前に，伊仙町職員の松岡由紀の著作『都市の子育て・島の子育て―「子宝日本一の町より」』に出会った[3)]。島の子育ての良さを語る中でお祝い事の存在を挙げ，「お祝いが醸成する“ここにいていい”という自尊心」と表現している。松岡は東京出身であるが，米国・英国留学を経て，地域再生の仕事をしていた際に徳之島を訪れ，その後移住することとなった。松岡によれば，島では生まれた直後の生誕祝い，入学祝い，成人祝いなどを親族のみならず，近隣の人々皆で祝うという。

松岡が記している「顔の広い人は一晩に40～50軒回る」，「料理は100人前」などというお祝いに関するエピソードは，彼女自身そうであったように，筆者にとってもにわかに信じがたいものであったが，今回の調査において，複数の場で何度も耳にした。徳之島の青年と結婚して島に移住してきた音楽療法士・芳村美聡氏の口から，「子どもの出産祝いの時には100人分の料理を用意して…」というフレーズが聞かれたときに，筆者はただちにその真偽を問いただした。すると周囲にいた人々からも，次々に「お祝いの仕出しの注文は，100単位だよ。」と同様の声があった。前述の松岡は「自分が産んだ一番大切な存在を周りの人が大切に扱うどころか，神様に近い存在として崇めてくれる，そんな経験は生後間もない子ども自体の存在価値のみならず，その子を育てる両親の誇りにもつながる。」とまとめているが，お祝いに集まった

人の数だけ，これから始まる子育てを支えてもらえるというような実感を持てる場なのではないか。

奄美の島々では，干支の年を「歳の祝い」として祝う風習がある。いわゆる喜寿や米寿のように，数え歳13歳・25歳・37歳・49歳・61歳・73歳・85歳・97歳…の節目ごとに，皆で集まってお祝いをする。子どもたちは，自分の節目である入学・卒業のお祝いを経験するだけでなく，大人や長老たちがそうして祝ってもらっていることも経験する。正月に行われることの多い，この歳の祝いの時には，入学式や成人式と同様，お祝いに駆けつける人たちも掛け持ちである。今回の調査でも「胸ポケットに，3,000円ずつ入れた祝儀袋を20～30…」「吸い物椀をもらっては次の家に移動，お腹はチャポチャポ…」と嬉しそうに語る人たちに，経済的な負担などを気にかけている様子は伺えなかった。つながりが希薄になった都市部では，もはや考えられないようなこの慣習であるが，お祝いは「お互い様」が確かに目に見える形で存在している。と同時に，子どもから長老までが集い，歌い踊り，喜びを分かち合う世代間交流の場である。子どもたちは，自然に多くの世代の人たちと触れ合って育っていく。

(3)「子どもが最優先」の意識～職場や公共の場における子育てへの理解

1月の天城町での聞き取り調査は，役場内の「天城町ユイの里ケーブルテレビ」で行った。島内の取材でさまざまな情報を耳にしている，同テレビアナウンサーの有薗恵里香氏の計らいで，5人の女性に集まってもらった。全員が30代の女性で，徳之島出身3名，結婚によって島外から移住した方が2名。現在専業主婦の方も1名含まれた。それぞれ子どもの数も0～2人と，話をしていても都市部の価値観とあまり変わらない印象をもった。そんな中で唯一，都市部とは大きく異なると確信したのが，子どもの病気やPTAなどの行事での休暇取得のことに話題が及んだときであった。役場に勤める女性たちは，口々に「夫と交替で休むなどしているが，基本的に職場で嫌な顔をされることはない」「本当は迷惑だが，仕方なく許可されていると感じたことはない」と話した。子どものことは最優先すべきと誰もが思っているのは，まだ子どものいない方も同様で，この島では男女変わりなく，また，近所でも職場でも変わらないようだ。伊仙町保健センターが平成28年4月にまとめた「伊仙町子宝支援」にも，聞き取り調査からの声として，「職場の理解が得られやすい」が挙げられている。

この「子どもが最優先」ということについて，亀徳保育園園長の名城氏が語ったエピソードを記しておきたい。調査前日（1月13日）に地元経済界有志の新年会があったという。仕事つながりのこの会合にあっても，会員は皆家族連れで出席する。中には，4人5人の子どもを連れての参加も珍しくないとのことだ。それが前提であるから，抽選会などのお楽しみが用意され，まず子どもたちにチャンスが与えられる。このような，子どもたちが大事にされる日常を実に楽しげに語る氏の姿を通して，保育園を経営する立場の方だから特別なのではなく，そこに出席している人たちの共通の認識であることが窺えた。

(4) 子どもがいて当たり前の光景

さらに，紹介しておきたいのは，筆者と同行した学生が目撃した，レストランでの子どもたちの姿と店員たちの対応である。ふと入口付近に目をやると，5人の子どもたちが並んで遊んでいる。その時の店員はと言えば，全く気にかけている素振りはない。学生は，鹿児島市内のファミリーレストランでアルバイトをしているというが，このように子どもが親から離れる場面では，すぐに店長が「危ないよ」と親元に帰すという対応をすると話した。しかし，子どもたちは遊んでいるものの，数分おきに自ら親元に帰ったり，年長の子どもの後を付いたりしながら，必要以上に走り回ったり，大声を出したりして騒ぐことはない。筆者たちを含め，子ども連れでない客たちが眉をひそめるような事態は一度もなかった。

ふと見ると，ドリンクコーナーに幼児用カップがあった。その数に驚かされ，写真を撮る許可を得るために店員と話をした。「たくさん子どもが来るから…」と，なぜ筆者が写真を撮りたいのかについて，今

ひとつ理解できないような表情であった。この島ではごくごく当たり前の光景なのかもしれない。アンケートの記述にも，次のような一文があった。「どこに行っても子どもが多いので（特に飲食店など），大人や小中学生も小さな子どもの扱いに慣れていて，寛容なところ」（原文のまま）。子どもがいるといつも「すみません病」だという母親たち[1]。徳之島では子ども連れでも，安心して出かけられる環境がある。

写真2　レストランに置かれた幼児用カップ

(5)「われんきゃ広場」での「ふれあい音楽遊び」から

「ふれあい音楽遊び」として1月13日に行った音楽活動には，16組の親子が集まった。0歳児4名，1歳児8名，2歳児2名，3歳と4歳がそれぞれ1名ずつであった。父親だけ，夫婦での参加もあり，親の参加は男性3名女性15名の計18名であった。

驚いたのは，参加者たちのリズミカルなあやし方である。音楽が鳴り始めると，自ら自然に身体を動かし子どもを揺らす。筆者はさまざまな場で音楽活動を行ってきたが，このような場面にはなかなか出会えない。また，子どもたちが自由に歩き回ったり，筆者の元に近づいたりしても，慌てる様子がなく，皆が笑顔で見守っている。前項の「小さな子どもの扱いに慣れている」は納得できる。活動後，広場のスタッフに「驚いた」と話すと，詳しい説明を求められた。スタッフにとってはごく当たり前の光景のようだ。そして，それは「六調」のお陰に違いないと理由付けた。筆者が指摘するまで，子どもをあやすこととの関連には気が付いていなかったようだが，島の人たちは誰もがこのリズムに乗れるのだという。「六調」とは奄美群島の祝いの席では，宴もたけなわになると始まるテンポの良い音楽である。太鼓や三線，指笛に歌と掛け声によるこの音楽には，踊りが欠かせない。子どもとのかかわりにリズミカルな働きかけは必須だが，それが徳之島の日常にあるということに今回はとどめ，音楽活動については次稿でまとめたい。

5　よりよい子育て環境のために～「NPO 法人 親子ネットワーク がじゅまるの家」の挑戦

高い地域力を背景に「子宝の島」として，高い出生率を維持している徳之島にあっても，いち早く親と子の居場所作り，子育て支援に乗り出したのが「NPO 法人 親子ネットワーク がじゅまるの家」である。「あまみ長寿・子宝プロジェクト」の事業報告書にも，徳之島町は住民主体の地域おこしグループとして紹介している。2000年に最初の拠点はスタートしていたが，2005年に設立，2010年にとして NPO 法人として認可された。「親と子の健やかな成長，安心して妊娠・出産・子育てができる街づくり」を掲げ，週3日「われんきゃ広場」を運営している。このつどいの広場運営事業に加え，子どもの一時預かり事業，病児保育室，ファミリーサポート事業，インターネットの育児支援サイト運営，妊娠・出産・子育てに関する相談・啓発活動事業，助産所業務に関する事業など，約10名のスタッフで実に精力的に活動を展開している。

1　平成28年10月19日報道　NHK テレビ『あさイチ』で，気を遣い過ぎる社会として，子どもを連れていると常に「すみません」ばかり口にしていると紹介された。

写真3～6 「親子ネットワークがじゅまるの家」の「われんきゃ広場」と取り組みの様子

しかし，「子宝の島」であっても，子育て環境以前に出産の環境に不安があったことが，「がじゅまるの家」代表理事の野中涼子氏の問題意識を刺激した。「がじゅまるの家」は2009年に，お産シンポジウム「どうする！？徳之島のお産」を主催しているが，きっかけは野中氏が助産師として勤務する病院の産科医師派遣中止による休診であったという。島の母子の安心を守ること，つまり妊娠・出産からつながる子育てのすべての環境を支える場があることが重要だと訴える。

2カ月に一度発行されている子育て情報誌を目にすると，徳之島の子育てと真剣に取り組む熱意が感じられる。時代の流れに合わせて少しずつ変化する子育てにも対応しつつ，島の親子のニーズに寄り添っているスタッフの姿勢には敬意を表したい。

5　子育て環境の変化

子どもたちが大事にされている徳之島の文化については，今も揺るぎないものであることを実感できた。その一方で「徳之島の子育て環境も，今，まさに変化の入り口にあるのでは」と感じるきっかけとなったのが，1回目調査における，行政職員が語った人口減への不安とそれに対する政策，保健センターで聞いた，「都会の若い人たちと変わらない，島の若者の意識」という情報であった。帰りの空港で見かけた川柳には，そのことを危惧する祖父母世代の声が映し出されており，再調査を決意したのである。本章では，どのような変化が生まれつつあるのかについて述べる。

(1) 平均理想子供数と現存子供数

2010年の国立社会保障・人口問題研究所の調査と，天城町のデータ，そして今回の筆者による徳之島でのアンケート調査を比較してみると，全国的なデータと大きな差異はないように思われる。聞き取り調査の中では，「高校生の我が子のクラスの半数は4人きょうだい」という話も聞いたが，今回音楽活動に集まった1～4歳の親，また保育園に通園している子どもを持つ親たちは，すでに意識が変化していることが

示唆される。天城町での聞き取り調査においても，理想子供数が3人の方は1名のみであった。特に，結婚によって島外から移住した方たちは，子どもが多くなると里帰りの旅費がかかることを挙げていた。今回のアンケートのデータを見ると，行政職員が現在は高い出生率であっても楽観はできないと，人口減への危機感を語っていた理由も理解できる。

表３　理想子供数と現存子供数の比較

	理想子供数	予定子供数	現存子供数
国立社会保障・人口問題研究所調査（2010年）	2.42人	2.07人	1.71人
天城町アンケート調査（天城町まち・ひと・しごと創生より）	2.88人	―	2.16人
徳之島町における調査アンケート（2017.1.13～14）	2.56人	―	1.57人

出典：国立社会保障・人口問題研究所「第14回出生動向基本調査（夫婦調査）」
「天城町まち・ひと・しごと創生」（平成27年10月）　アンケート年月日については不明
徳之島町のデータは今回の調査におけるアンケート結果（対象26名）

(2) 農業構造の変化

農業における変化が，子育ての変化にもつながっているのではないかという，ユイの里ケーブルテレビ有薗氏の情報を拠り所とし，農業に関するデータを調べた。

徳之島は奄美群島の中でも，農業の盛んな島である。耕地面積は，6,890ha であり総面積の28％を占め，一戸当たりの平均耕地面積は2.5ha と全国平均の1.8ha と比較しても大きい。土地の集約が進んだことで1.0ha 未満の小規模農家が減少し，2.0ha 以上の大規模農家が増加，専業農家の占める割合も増えている。農業に就業している人は26％を占め，全国の4.6％の5倍以上である。3町とも，15歳以上の就業者の主な職種では農業が1位である。新規農業者数は年度によってバラつきもあるが，認定農業者数は増加している。全国のデータと比較しても，徳之島は農業に活力のある土地と言えそうである。大規模な農業経営になると，自宅近くに農地があった頃の農業ではなく，自宅から離れた集約された農地へ，いわば出勤していく形へと変化していることが窺える。自宅のそばで子どもを遊ばせながら，とはいかないであろう。亀徳保育園では，待機児童数が20名を超えるという。以前は一定の年齢までは預けずに，家庭内保育という風潮もあったそうだが，確かに事情が変化しているようだ。

(3) 祖父母世代の働き方の変化と子育てにかかるお金

11月の調査の際に，偶然空港で見かけた川柳には，祖父母世代の子育てへのかかわりが垣間見えた。孫を愛おしく思うもの，子のため孫のためにと大変ながらも子育てに精出しているものの中に，「今日は孫　遊びに来るぞ　年金日」といった句を見かけた。現代の川柳特有の，皮肉や冗談の混じったものとも捉えられようが，明らかに数世代が一緒に暮らしている，孫が出入りするのが日常，という筆者の抱くイメージとは異なっていることが窺える。このことは，「がじゅまるの家」でも聞いた，祖父母世代はまだまだ自宅の外で勤めている，という情報と合致するものであると思われた。確かに，まだ小さな孫の子育てに手がかかる50代から60代は，勤めていても不思議はない。大島紬など家内に女性の仕事があったかつての生活と今とでは変化してきて，祖母世代が外で働いて現金収入があることが求められているのかもしれない。徳之島の子育ては相互扶助で支えられてきたが，全国的には子育てはサービス化されたものである。島にも徐々に，英会話やピアノの教室，学習塾といった，いわゆる子育てにはお金がかかると言われる教育産業が広がりつつあるという。また，低学年からスポーツ少年団に入ることも増え，島外への遠征費が大きな負担だという声も聞いた。祖父母世代が金銭的な支援をした

いと考えてもおかしくない。「がじゅまるの家」で話を伺ったファミリー・サポーターの方たちは，毎日孫が出入りしていると話し，「これから孫を少年団の活動に送っていくので…」と去っていったが，祖父母からこのような手厚いサポートの得られるケースは，すでに一般的なものではないのかもしれない。

(4) インターネットの普及

天城町保健センターで耳にした「都会と変わらない」という理由は，「近所を頼るより，まずはネットで検索」ということだという。このことを聞いたとき，1回目の11月の調査初日であったため，徳之島の子育てに対するイメージが崩れていくような思いであった。

これを裏付けるような話として，昼夜逆転して不登校になってしまった我が子をもつ母親の話を聴くことができた。Wi-Fi 環境のある場所に夜な夜な出掛け，インターネットゲームをしていたという。当初，夜中に家を出ている子にも気付かず，不登校の原因として，全く想像もできなかったことだったと語った。このようなことは，徳之島に特徴的なことではなく，どこにでもありがちな話である。しかし，徳之島におけるインターネット環境に危惧の念を抱いているのは，「がじゅまるの家」の理事でスタッフの前田氏である。氏は，「親世代（40～50代）と子供世代（中高校生）の，インターネットへの興味・関心，依存度には大きな差がある。その差は，都会に比べて徳之島の方がはるかに大きく，親世代は子供たちがどのようなものに触れているか全く知らない。」と話す。インターネットの弊害が大きくなってしまう前にと，自らインターネットの安心・安全な利用を啓発するための研修に余念がない。

現代におけるインターネットの恩恵は大きく，もはやなくてはならないものである。へき地教育での活用も有効である。「かじゅまるの家」においても，インターネットを利用してこそ，育児支援サイトや掲示板「しゃべらんば」の運営ができるのである。その弊害については多く語られているので，ここで改めて筆者が取り上げることでもないが，重要なことは，徳之島の子育ての良さを支えてきたのは，人と人のつながりであるということである。インターネットによるコミュニケーションはフェイス・トゥ・フェイスのそれがなくても，成立してしまう。アンケートに，徳之島の子育ての良さとして，「気軽に声をかけてもらえるから，子育て中に感じやすい孤独や孤立感を感じない」との記述があったが，子育てに疲れた時，スマホやタブレットは自ら声をかけてはくれない。「若い人たちは，自分たちの言うことよりスマホで調べたことを信じる」と年長者が思い始めたら，島に残っている世代間の交流は確実に阻まれることだろう。空港の川柳には「気掛かりは　スマホが言葉を忘れさせ」というものもあった。インターネットとの付き合い方という面においても，今まさに岐路に立たされているのは徳之島だけでの問題ではない。

おわりに

調査前に抱いていた「子宝の島」に対するイメージ，実際に訪れた時のわずかなイメージのずれ，それらを解くべく，2回の調査で多くの方に会って，聞き取り調査，アンケート調査，音楽活動を行った。天城町役場企画課の大久様をはじめ，伊仙町・徳之島町役場の総合戦略や子育て支援を担当されている職員の方々，NPO 法人「 親子ネットワークがじゅまるの家」代表理事野中涼子様，理事の前田美千代様，その他スタッフ，ファミリーサポーターの方々，ユイの里ケーブルテレビの有薗恵里香様，ほか聞き取り調査にお集まりいただいた方々，音楽療法士の芳村美聡様，亀徳保育園名城園長様と名城事務長様，それぞれ多くの情報をいただいた。また，ふれあい音楽遊びに参加いただいた皆様，亀徳保育園保護者の方々にはアンケートにご協力いただいた。この場を借りて，お礼を申し上げたい。

「がじゅまるの家」の理事・前田氏は「徳之島の良さと危うさは常に背中合わせ」と表現した。伝統の闘牛の話や自殺率の高さ，長寿の島と言われる一方で若年層の死亡率の高いことなどに話が及んだ時であ

る。しかし，子育てにおいて「危うさ」は似つかわしくない。筆者の感じた変化が「危うさ」につながることのないよう，また，単に人口減への危機感だけに終始することのないよう，徳之島の子育ての良さを維持してもらいたい。変わりつつあるとはいえ，日本が忘れかけたものの多くが残っているこの島が，日本の将来に道筋を照らす手掛かりとして，永遠に「子宝の島」であり続けることを願う。

謝辞

本研究は平成28年度鹿児島国際大学附置地域総合研究所共同研究プロジェクトの研究助成を受けて実施したものである。

引用文献

1）「伊仙町子宝支援」伊仙町保健福祉課・保健センター（平成28年4月）
2）松山光秀著　2009 『徳之島の民俗文化』南方新社
3）沼尾波子編著　2016 『シリーズ田園回帰４　交響する都市と農山村　対流型社会が生まれる』農村漁村文化協会

参考文献

1. ウィキペディア徳之島　https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%B3%E4%B9%8B%E5%B3%B6
2. 島の散歩　徳之島の気候　http://shimanosanpo.com/churajima11/tokuno00/kikou.htm
3. 天城町まち・ひと・しごと創生総合戦略　平成28年10月
4. 伊仙町まち・ひと・しごと創生総合戦略　平成28年12月
5. 徳之島町まち・ひと・しごと創生総合戦略　平成28年12月
6. 南の島の楽園　奄美群島への移住支援サイト　ねりやかなや http://www.neriyakanaya.jp/life/childcare/toku.html
7. 平成28年度版　少子化社会対策白書　内閣府
8. 「あまみ長寿・子宝プロジェクト」事業報告書　https://www.pref.kagoshima.jp/ae01/kenko-fukushi/kenko-iryo/project/documents/
9. 九州農政局ホームページ徳之島の農業　http://www.maff.go.jp/kyusyu/seibibu/kokuei/14/topics/index.html